

アジアを 読む

12

印パ関係改善を模索 国際関係の変化が後押し

鳥インフルエンザの感染拡大など陰鬱なコースが続く中で、最近の明るい出来事はインドとパキスタンが関係改善へ踏み出したことだろう。

1月に行われたインドのバジパイ首相とパキスタンのムシャラフ大統領の会谈で、両首脳は関係改善への努力を続けることを表明した。2001年12月のパキスタン側イスラム過激派によるインド国会襲撃事件以来、途絶えていた政治対話が復活する見通しとなった。

「カシミール」の領有権紛争を抱える両国は1947年の建国以来3度にわたる本格的な戦火を交えた。局地的な衝突は数え切れず、99年のパキスタン軍によるインド側カシミール侵攻時には一触即発の危機が高まった。

両国の半世紀を超える対立関係はもろろカシミールの帰属問題にある。パキスタンはイスラム教徒が圧倒的に多く、インドはヒンズー教徒が多い。「カシミール」の住民の大半はイスラム教徒である。英国領インド帝国からインド、パキスタンが独立する時、イスラム教徒の多い地域はパキスタンへの帰属を選んだ。ただ、カシミール藩王国の当主は自らヒンズー教徒だったためにインドに加わる道を選択した。歴史的な対立はこの時から始まった。

イスラムを建国の理念に置くパキスタンに対し、複雑な宗教事情を抱えるインドは国家統合のために非宗教を理念に掲げる。1億1000万人ものイスラム教徒を内に抱えるインドにとって、

イスラム教徒が多いという理由でカシミールの領有権を放棄するわけにはいかない。カシミール問題は単なる領有権争いではなく、両国の国家のあり方に根ざしている。

ただ、両国とも国際関係を意識しながらカシミール紛争を利用してきたことは否めない。4年ほど前、お忍びで日本を訪れた南西アジア担当の米國務省高官と夕食をする機会があった。その高官がカシミール紛争を「軍事ゲーム」と表現したことを覚えていた。

カシミールを巡る軍事緊張は中国との対立を抱えていたインドの軍拡に有利に働いた。軍部が圧倒的な力を持つパキスタンにとってもインドとの対立は軍事優先路線への追い風となった。冷戦下、パキスタンはソ連とインドとの親密な関係を牽制するとともに、米国に対し戦略の基地を提供し多額の資金援助を得てきた。

米高官が「軍事ゲーム」と呼んだのは、局地的な緊張を利用して国内の引き締めと軍拡路線を進め、さらに両国間紛争を大國間のあつれきに重ね合わせる自国の利益に結びつけてきた側面が強いかからだ。ただ、核保有国同士、軍事ゲームである。根底には独立以来の根深い対立があり、「世界で最も危険なゲーム」であるのと言つてもいい。

このゲームを取り巻く国際環境は冷戦の終焉、米同時テロ事件、アフガン・タタリバン政権崩壊を経て劇的に変わった。インドと中国は長年の冷えた関係に終止符を打ち、関係改善への動きはめざましい。米国はテロとの戦いのためにパキスタンとの関係に配慮しているものの、南西アジア外交の軸足を潜在力豊かなインドへと移している。米中ともに南西アジアでの冷戦構造の残滓を一掃し、この地域の安定を重視するようになった。

逆にパキスタンは長年続けてきた親米路線の負の反動に苦慮している。米中のインドとの関係改善に加え、国内イスラム原理主義者の反発が強まり、特に外交の方向を見出せないからだ。パキスタン政府が最近、カシミールの危機をあおってきたイスラム武装勢力のインド側への越境テロを取り締まるようになつたのも、南西アジアのこうした国際関係の変化と無縁ではない。

深い対立の根を持つ印パの関係改善は容易ではないが、国際関係からみると今回が絶好のチャンスである。印パを覆ってきた大國の影はかつてないほど薄らいでいる。アジア全体の安定、南西アジアの経済発展のために対話だけは重ねてほしいものだ。

(日経香港社 奥村幸広)